

# 寄人衆の役割に見る五箇祭

「多様なコミュニティが結び、支える祭礼の一事例」

加藤 賢治

## 寄人衆の役割に見る五箇祭

多様なコミュニティが結び、支える祭礼の一事例

加藤 賢治

Name :

KATO Kenji

Title :

The part played by “yoritoshu” as seen in the Goka Festival-an example of a festival that brings together various communities in mutual support

Summary :

Goka Festival is a festival held in May in Shiga Prefecture in which “yoritoshu”, the group of people helping to carry out the festival, play an important role. When watching this local festival closely it is interesting to see that people from various neighboring communities are also involved. In this report I will examine the nature of the interrelations of small communities within a larger community.

はじめに

現在の天津市北部、旧志賀町のJR志賀駅に程近い樹下神社を氏神とする、北船路集落、守山集落、木戸集落、荒川集落、大物集落は、西に急峻な比良連峰、東に琵琶湖を臨むという風光明媚な地域として知られる。この地域の南に位置する和邇荘、北の比良荘は、それぞれ和邇川、比良川が運んだ砂れきによる平地が広がるが、対象とする今回の地域は山裾から琵琶湖までの距離が短く、五つの集落は南北に細長く連なる特殊な地形の上に位置する。そして、現在は国道一六一号線、湖西バイパス、JR湖西線が民家の隙間を縫うように走っているが、近世には、北国海道（西近江路）という湖西を貫く幹線道路が敷かれていた。

この五つの集落の氏神である樹下神社では、例年五月五日に五箇祭ごかまつりという祭礼（本祭）が行われる。この祭礼の詳細については、主だった先行研究がほぼ存在せず、志賀町史（二〇〇二年）では、第二巻、第三節「くらしと宗教と文化」の項で「木戸庄と十禅師権現（樹下神社）」に神社の解説がされているが、五箇祭の詳しい記載は無い。

平成二八年(二〇一六)度の成安造形大学附属近江学研究所の「近江の道」をテーマとする研究の一環として、文化誌「近江学」第9号に掲載された対談記事「石出し車が行くみち ― 神々と暮らしが交差する風景 ―」には、祭礼や石の積み出しに使われる「道」に焦点を当てながら、五箇祭の一連の流れが報告されている。筆者もその取材に関わり、堀内美緒氏による「滋賀県大津市木戸地区樹下神社に関する祭祀組織・寄人衆(よりとしゅう)について」(二〇〇七年 京都大学大学院農学研究科修士論文所収)、山形蓮氏による「歴史的観点から見た五箇祭について」(二〇〇九年)、同じく山形蓮氏編集のDVD『五箇祭』(二〇一〇年)などを参考にした。

今回、平成二八年の五箇祭を取材した。特に興味を覚えたものの一つは、堀内氏も着目しているが、祭礼において一定の役割を果たす「寄人衆(よりとしゅう)」の存在である。五箇祭は五つの集落によって行われ、近江の祭礼ではよく見られる典型的な郷村祭礼であるが、寄人衆は、五つの集落のうち、木戸、北船路、守山の三集落のみに存在し、世襲(代々寄人衆を持つ)であるにもかかわらず人数も各集落で差がある(木戸・一軒、北船路・十四軒、守山・十七軒)。

もう一つは、筆者が昨年テーマとした、祭礼に関わる古くからの住民と、新しく地域に移住してきた住民との関わりについてである。寄人衆の取材を中心に行った、守山集落のみ、新住民が神輿を担ぐという取り組みを実現させている。

今回の論考においては、この特筆すべき二点についてまとめてみた。

### 一、樹下神社と五箇祭

#### (ア) 樹下神社と日吉山王権現との関わり

志賀町史(二〇〇二年)では、第二巻、第三節「くらしと宗教と文化」の項で「木戸庄と十禪師権現(樹下神社)」に五箇祭の中心となる樹下神社の解説があり、まずは、神社の成り立ちを見てみたい。

現在の樹下神社(かつては十禪師権現)は、木戸荘の莊園鎮守社として勧請され、北船路、守山、木戸、荒川、大物という五カ村の氏神となっている。

一番宮	十禪師権現	本地地藏菩薩	五ヶ村官
二番宮	大八王子権現	本地千手観音	守山宮
	同北ノ方二小宮有り	三宮普賢菩薩	
三番宮	同南ノ方二大岩有り	牛ノ御神	大威徳神
		聖真子権現	歎喜寺
四番宮	十二所権現	大物荒川	之宮
		三十番神なり	七シウクワン
五番宮	地主権現	三十二人衆	
		本地薬師如来	木戸宮

同北ノ方に小宮 八幡大菩薩 本地阿弥陀如来  
 南ノ方ニ 大行事宮 本地毘沙門天王  
 同小宮有り 八幡大菩薩 本地阿弥陀如来  
 同地藏堂有り これ八十禪師権現神宮寺なり  
 「木戸庄御宮之次第書」(中村勘左衛門家文書) 慶長十八年(一六一三)

右記の通り、一番宮が十禪師権現(本地仏が地藏菩薩)で五つの集落全体の祭神となっている。二番宮が八王子権現で本地仏が千手観音、三番宮が聖真子権現で本地仏が阿弥陀如来、五番宮が地主権現で本地仏が薬師如来であり、それぞれの集落の氏神となっていることがわかるが、権現という神と本地仏の名前を見ると、日吉大社の山王上七社と全く一致するのである。

「木戸庄御宮之次第書」(中村勘左衛門家文書)は、慶長十八年(一六一三)に書かれているので、神仏習合の神号である日吉山王権現の旧称が使われているが、明治元年の神仏分離令以降は、完全に神と仏が離され、これも日吉山王権現と同じく、旧称の権現は使われなくなり、

十禪師権現(五カ村の神) ↓ 樹下神社  
 八王子権現(守山集落の神) ↓ 牛尾神社  
 聖真子権現(荒川・大物集落の神) ↓ 宇佐神社  
 地主権現(木戸集落の神) ↓ 地主神社(日吉大社では東本宮)と、それぞれの地主神社を除いて、日吉大社の上七社と同じ

名称がつけられ、現在の名称となっている。

また、同じく中村家文書「木戸庄御宮之次第書」には、四番宮の十二所権現に祀られる三十番神の記述が見られ、この神は神仏習合に裏付けられる法華經守護の一日一神を基準とした神であり、比叡山延暦寺と習合した日吉大社とのつながりをここでも感じるのである。

#### (イ) 北船路集落の八所神社

そして最も興味深いのは、北船路集落の神である。北船路集落は、五箇祭に参加する集落の一つであるが、唯一、樹下神社境内に集落の社は無く、集落内の八所神社に鎮座する。この八所神社もまた深く日吉山王権現と結びついている。

「北船路行磨由緒記」(叡山文庫)によると、元龜二年(一五七一)織田信長による比叡山の焼き討ちの際、麓の坂本の日吉大社も大きな被害を受けたが、その日吉大社を粉骨砕身の努力で復興させたという祝部行丸(生源寺行磨)が、日吉大社を追われ、比叡山門領であった北船路村にしばらく滞在し、一時期、山王祭をこの地で催行したと伝えられている。

現在も、日吉山王祭では、最終日の四月十五日に行われる西の神事に、北船路八所神社の村役人が、西本宮に参列し、船路御供の献納を行っている。

八所神社の祭神は、白山菊理姫神と大己貴神で、いずれも山王上七社に現れる西本宮系の神で、これらの神が、五箇祭の当

日に樹下神社に迎え入れられるという流れは大変興味深い。

## 二、五箇祭りにおける寄人衆の役割

### (ア) 女神を迎え入れる五箇祭

五箇祭自体がいつ頃から始められていたのかという資料は乏しいが、延宝五年(一六七七)の「木戸五ヶ村四月一番之酉神事次第書」に記述が見える。しかし、五箇祭といつ頃から呼ばれていたのか、また、いつ頃から現在の形に至ったのかは、わからないのが現状である。

ただ、先述の通り、現在の神社の名称や、かつてこの地域が比叡山門領であったことなどを考えると、間違いなく日吉山王権現との深い結びつきがあり、祭礼のかたちにも祝部行丸(生源寺行鷹)の伝承が何らかのかたちでこの祭礼の深部に現れているように思える。

現在の五箇祭の主な筋書きは、北船路の女神(白山菊理姫神)を無事に樹下神社境内に迎え入れ、最後に見送るところとあり、その女神が通る「道」を大切に扱う。

そして、祭のために整備されたその「道」を、神輿が無事に往来できるように確認するという「寄人衆(よりとしゅう)」の存在が目目される。

### (イ) 五箇祭りにおける寄人衆と番人衆(ばんどしゅう)

「寄人衆」は、木戸集落に一軒(一名)、北船路集落に十四軒(十四名)、守山集落に十七軒(十七名)の合計三十三軒(三十三名)で構成されている。世襲というかたちで、代々その家長が寄人を受け継ぐが、家長は寄人株を所有していることが前提で、売買することも可能である。株は、守山集落の場合、一枚四畝一〇歩の山四枚で寄人の一株とされている。神輿など祭礼で費用がかさむ場合にこの寄人株の財産が使用される仕組みになっている。

そして、寄人三三名のうち、寄人株を持った古い順から十名を「番人衆(ばんどしゅう)」と呼び、年に一度「カクセツ(格節)」という寄り合いがもたれる。その十名の番人衆は順番で当番が決められ、当番の家で小正月(例年一月十五日)に「カクセツ(格節)」が行われる。

カクセツの日には、当番家に、寄人衆の守護神であると言われる樹下神社の境内の十二社神社の掛け軸や、三十番神の御札などが飾られ、お供え物は、榊、洗米、塩、尾頭付きの鯛一匹。当番家の家長の挨拶と、三献の後、膳が運ばれ飲食が行われる。現在のカクセツはこれ以上のことはないようであるが、かつては、寄人株の名簿の確認や、寄人衆の採め事などの話し合いもされていたと推測される。

(ウ) 五箇祭における寄人衆の役割  
・バンバ改めの儀式

本祭の前日、五月四日に「バンバ改め」という寄人衆が集まって行われる重要な集まりが行われる。バンバ（馬場）とは、樹下神社から参道を琵琶湖に向かって下り、琵琶湖に出たところの浜一帯の名称であり、五箇祭においては、御旅所に繋がる場所であり、最後の見せ場の舞台となる重要な場所である。その場所（バンバ）が綺麗に整備されているかどうかを確認することを「バンバ改め」という（写真1）。

平成二八年五月四日の「バンバ改め」は午後四時から、木戸公民館の二階の広間で行われた。正面の床の間に、「樹下皇大神」の掛け軸と、神棚が設置され、その前に寄人衆が年齢の順番に座する。向かって左の列が守山集落で、右が北船路集落である。ブク（服）と呼ばれる喪中の者は参加できないので、守山集落の寄人衆は、本来十七名のところ十名の参加、北船路集落は十四名のところ六名、木戸集落は一名のところ〇名（参加なし）の参



写真1：琵琶湖の手前の砂地一帯を「バンバ（馬場）」と呼ぶ

加であった。その内、古株である番人衆は本来十名のところ、四名が参加されていた（写真2）。

全員揃ったところで、守山、北船路それぞれの寄人衆の若手が、この日の欠席者（ブクを含む）を紹介して、出席者を確認する。この日は、新しい顔が複数あったので、特別に自己紹介が行われ、本来は寄人衆

を持つ家長が出席しなければならぬが、家長の代わりにその長子が出席したとの紹介などもあった。その後、この場を準備している木戸集落のキモイリ（肝煎）二名が挨拶をして、三献を行い、膳（この日は弁当、最近には弁当が用意されているが、かつて二〇年ほど前は豪華な料理が出ていたようである）が用意され会食が始まる。

木戸集落のキモイリ二名は、二手に分かれてビールを注ぎながら、和やかな雰囲気をつくる。四〇分ほど経過したところで、若手がしめ縄とともに、そこにつける御幣の準備を始めた（写真3）。そして、会食が開始されてから、一時間ほどすると、若手中心の寄人衆たちがほぼ全員で、バンバ改めに出発する。



写真2：木戸公民館の2階 向かって右が北船路、左が守山の寄人衆 手前2名が木戸のキモイリ（肝煎）

バンバ改めでは、神輿が問題なく通過できるかどうかを確かめるため、バンバの溝蓋や、水たまり、デコボコ、また、神輿の屋根を傷つけないかということで参道の両脇の木々の枝張りまでを確認することが主な任務となる。しかし、近年、参道はアスファルトで固められ、溝蓋もコンクリートまたは金属となっているため、改めでの確認の必要はないようであった(写真4)。

ただ、御旅所の砂地の確認は全員で慎重に行われ、神域を示すしめ縄が張られ、公民館でつくられた御幣が丁寧に取り付けられた(写真5)。



写真4：しめ縄を手にバンバに向かう寄人衆



写真3：しめ縄につける御幣をつくる守山の寄人衆

の結果報告である。この日は、「明日の本祭の準備は滞りなく終わりました。特に問題はありませんでした」と報告され、この儀式も無事終了した(写真6)。

現在では、この「バンバ改め」の儀式は形式的に行われているが、本来のこの儀式はかつて祭礼を行う上で大変重要であったという。

実は、このバンバ及び参道の整備は、その場所を集落の一部とする木戸集落の氏子の仕事であり、五月四日までに完璧に整備をしておかなければならない。「バンバ改め」において、バンバや参道に「不備あり」と寄人衆が指摘すると、その報告が直ちに木戸集落の氏子総代に伝えられ、木戸集落の氏子たちが総出でその不備を改善しなければなら



写真6：「バンバ改め」の報告



写真5：寄人衆によって綺麗にしめ縄が張られた御旅所

ない。かつては、一晩かけてその不備を正すなどしたことがあると寄人衆の長老格である番人衆から話が出ていた。

要するに、寄人衆が、木戸集落の氏子によって行われるバンバや参道の整備が、できていないことを理由にこの祭礼を止めさせるといふ権限を持っていたとも言えるのである。

午後七時頃、問題がなければ解散となる。木戸集落のキモイリは、木戸集落の氏子総代に「バンバ改め」の無事を報告。守山集落の寄人衆は、集落の氏神である若宮神社に向向き、その参道に置かれた太鼓を叩く。それが、祭礼開始の合図となつて、各家の提灯に灯りが灯るのである（写真7）。北船路集落の寄人衆は、集落の中心にある神輿倉に向向き、神輿出しを見届け

る。日吉大社の神職によるお祓いがあり、集まった多くの担ぎ手によって神輿が出され、八所神社へと向かう（写真8）。八所神社の鳥居の前では、「わっしょい」の大きな掛け声とともに国道一六一号を跨いで何度も往復する所作に迫力がある。そして、午後九時、神社の拝殿に上げられ、集落の担当者は徹夜で神輿の



写真7：守山の寄人衆がバンバ改めの無事を告げ、祭りの始まりを知らせる太鼓が鳴る

守りをするのである（写真9）。

#### ・寄人衆の役割

寄人衆は、一見バンバや参道の点検のみを担当する集団とも見えるのだが、それぞれが株を持って世襲で受け継いでいることや、整備の不備を理由に祭礼の催行に影響を与えることができる。また、寄人衆の中に、番人衆と呼ばれる長老格の存在があるなど、五箇祭全体においても非常に大きな力を持っている。

寄人衆は、五箇祭全体の役職であるが、記述の通り、構成員は北船路十四名、守山集落十七名、木戸集落一名というように偏っている。これは、日吉大社とのつながりの中で、北船



写真8：北船路集落の神輿の倉出し



写真9：無事八所神社の拝殿に北船路集落の神輿があげられる

路集落の神輿を別格として、木戸集落の樹下神社に迎え入れるという形を重視したためとも考えられる。寄人衆が三二名であるというその数が、神輿一基を担ぐ時の適正な人数であることを考えると、かつて、北船路の神輿を樹下神社に担ぎこんだ人たちが寄人衆の起源であるとも想像できる。これは、あくまでも想像の域を超えないが、何れにしても、五箇祭における寄人衆の役割は重要であるということが言えよう。

#### (エ) 五箇祭当日

・北船路の女神の迎え入れ

五月五日の午前六時前、「卯の刻」、北船路八所神社の神輿が樹下神社に向かって威勢

良く出発する。二〇〇メートルほどまっすぐ、琵琶湖へ出る(写真10)。

そこでトラックに積んで、大太鼓を先頭に湖岸の道をゆつくり北へ進む。

十五分ほど進むと、守山集落の「シマ」と呼ばれる場所に到着。そこに守山集落の氏子たちが、迎えの挨拶に来ている。



写真10：5月5日の早朝八所神社を出る北船路の神輿



写真11：守山集落の「シマ」で担ぎ手が北船路の神輿を迎える

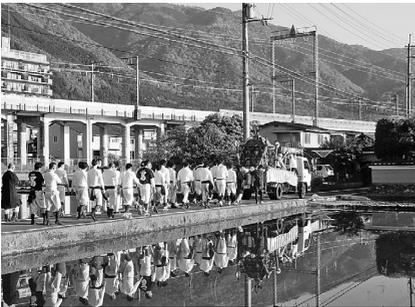


写真11-1：比良山系を背後に樹下神社に向かう神輿

そして、神輿の担ぎ手十数名がこの北船路の神輿を担ぐために同行する(写真11)。実は、かつて神輿を担いでいた頃は、この場所まで、北船路集落の氏子が担ぎ、ここから守山集落の担ぎ手に交代して、木戸集落の樹下神社の一の鳥居まで担いでいたという。現在は、トラックに積まれているため、守山集落の担ぎ手は後ろについて歩くのである(写真11-1)。

また、十五分ほど北へ進むと、木戸のバンバ(馬場)である。そのバンバに入る入り口を「バンバサキ」と呼ぶが、そこには、木戸集落の大太鼓が、北船路集落の大太鼓を迎えに来ており、二つの太鼓を合わせる「太鼓挨拶」が行われる(写真12)。

バンバサキから、神輿は担がれるが、そこから樹下神社の一

の鳥居までは守山集落の担ぎ手が担ぐ。そして、一の鳥居から樹下神社までは、木戸集落の担ぎ手が担ぐ（写真13）。最後は再び北船路集落の担ぎ手に変わって境内に進む。午前六時五〇分、境内では大物集落の神輿が待ち構えており、神輿同士が鼻を合わせると一気に二つの神輿が拝殿に駆け上る。大物集落の神輿の神様は男神（北船路の婿さん）であり、早朝に女神を迎え入れるという儀式がこの鼻合わせだとも言われている（写真14）（写真15）。俗説ではあるが、これも、日吉大社の山王祭における午の神事に見られる「神様の結婚」を意識して行われてきたのかもしれない。二基の神輿は拝殿に置かれた後、一旦全員解散となる。

このように、五月五日の早朝は、北船路の神輿を、守山、木戸、大物の各集落が丁寧を迎えるという儀式となっている。

・北船路、守山集落の氏子たちの樹下神社入り

午後三時前、守山集落では若宮神社に、祭礼に参加する全員が集まる。守山自治会の自治会長、副会長、会計の三役、氏子会の氏子総代、副総代、袴を着た八人衆、紋付の六人衆、肝煎（各家の長男が順番で担当する。毎年交代で、役割は集落の代表として挨拶を行ったりする）、金棒引き（行列の先頭を歩く真つ赤で派手な衣装を着け



写真13：一の鳥居までは守山の担ぎ手が北船路の神輿を担ぐ



写真12：バンバサキでの「太鼓挨拶」



写真15：2基の神輿が一気に駆け上がり拝殿に上がる



写真14：樹下神社境内に待っていた大物の神輿（男神）と迎え入れられた北船路の神輿（女神）が鼻を合わせる

た二五歳までの男子二名。彼らは山調方という氏子集団に属す。第三項で詳細を記す)、宿親(山調方の世話役。金棒引き衣装や飲食など、前日や当日に様々な世話をする役)、そして神輿の担ぎ手などが集まる(写真16)。

午後三時過ぎ、北船路集落の同じく祭礼に参加する行列が、一本琵琶湖側(東側)の道を通過した時点で、樹下神社に向かって歩き出す(写真17)。

三時三〇分、北国海道を北上し、木戸集落へ入る手前の北野という場所で「北野の挨拶」が行われる。北船路集落が先に到着し、守山集落を迎え入れ、肝煎同士が挨拶を交わすというものである。挨拶は儀礼的で、ある種の儀式であるが、初めて担当するもの同士が無言で行う所作に緊張感が漂う。この日の早朝、北船路の神輿を守山の神輿担ぎがお手伝いをしたお礼の挨拶だといわれている(写真18)。

四時前に、北船路、守山集落の一行は、一旦樹下神社にお参り(宮入り)をし、木戸、大物、荒川集落も同じく、神社に参拝する(写真19)。

四時三〇分、樹下神社から琵琶湖側へ少し下った「中西の辻」と呼ばれるところに、肝煎と神輿担ぎが集合し、祭りが最も盛り上がる神輿渡御の始まりを合図する「五箇の挨拶」が行われる(写真20)(写真21)。

準備が整うと、交差点の南の辻に立つ守山集落の肝煎



写真17：歩き出す守山の神輿担ぎ



写真16：若宮神社の参道前に集合する守山集落の氏子たち



写真19：金棒引きを先頭に各集落の氏子が樹下神社へ一旦宮入する



写真18：「北野の挨拶」左が北船路、右が守山のキモイリ(肝煎)

が「準備が整いましたがいかがでしたでしょうか」と大声で伺いを立てると木戸集落の肝煎が「では行いましょう。催行いたします」と掛け声をかけて、神輿渡御が始まるのである。いずれかの集落が中心となっているのではなく、みんなで確認しあい、伺いを立ててから、物事を進めるといような儀式のあり方は、非常に奥ゆかしく、日本的な共同体の形成の知恵ともいえようか。

・神輿渡御

参道を神輿担ぎたちが肩を組んで待機し、機会を待つて、一気に境内に駆け込み、拜殿から神輿を降ろすのである。その際、神輿を大きく揺さぶるその所作は勇壮で、五箇祭の一番の見所であろうか（写真22）（写真23）。神輿は、一旦境内に置かれ、入念に飾り付けがされる。その後、順番に御旅所へと出発する。各集落とも神社を出た鳥居前で、「わっしょいわっしょい」と掛け声を掛け、大きく神輿を担ぎ上げるという見せ場がある。そしてそのあとはトラックへ乗せて、御旅所へ移動する（写真24）。

神輿担ぎが神社へ入り「拜殿出し」をする順番は、木戸、守山、荒川、大物、北船路で、神社から神輿が出る順番は、木戸、守山、大物、北船路、荒川となっている。この順番も興味深い。神輿担ぎが入る順番は、北船路が最後になっており、拜殿から降ろす際、女神である北船



写真21：「五箇の挨拶」竹の棒を横にして話す守山のキモイリ



写真20：宮入の後、参道を琵琶湖よりに坂を下り中西の辻に全集落の氏が集合



写真23：拜殿で大きく揺さぶられる神輿



写真22：肩を組んで境内に入るのを待つ神輿担ぎたち

路の神輿のみ、大きな揺さぶりなしで最後に肅々と行われる。神社から神輿が出る順番は、大物の男神の後に、北船路の女神が続き、それを見守るように、最後に荒川集落の神輿が続くのである。

・還御、バンバの別れ

午後六時、御旅所に五基の神輿が勢ぞろいし、神事の後、神楽などが催され、一時を過ぎす（写真25）。

六時三〇分、木戸、守山、荒川、大物の神輿がまず神社へ向かって還御するが、北船路は最後に動き出す。木戸のバンバでは、先に木戸の神輿は、樹下神社の参道に入るが、守山の神輿は、バンバサキと呼ばれる樹下神社の参道へ向かうバンバの出口付近で待機。荒川と大物の神輿は、北船路の神輿を待ち構える。そして北船路の神輿が、少し大回りをして琵琶湖の水際近くにさしかかった瞬間、荒川、大物の二基の神輿が背後に回って追いかけるのである。そして、勇壮に動きながら北船路の神輿は、バンバサキから早朝にやってきた湖岸の道に入るのである（写真26）（写真27）（写真28）。

この所作は、北船路の神輿との別れを惜しむものであると言われ、祭礼の最後を飾る催事である。見物人も神輿担ぎも祭礼関係者も一気に盛り上がり最高潮を迎えるのであるが、夕刻の琵琶湖と山並みを背景に美しくも少



写真25：御旅所に勢ぞろいする神輿



写真24：各集落の神輿は、境内で飾り付けの後、渡御へ向かうが、その前に樹下神社前を勇壮に練り歩く



写真27：バンバサキで別れを告げる神輿（神）たち



写真26：バンバに出た北船路、大物、荒川の神輿

し物悲しい幕切れにも見えるのは不思議である。

五箇祭はこのようにして終了するのであるが、全体を俯瞰してみると、終始北船路集落の女神を乗せた神輿を如何に迎え入れ、送り出すのかという流れになっている。そして、本章(ウ)「五箇祭における寄人衆の役割」で述べたように寄人衆がバンバや参道の点検としながら、祭の催行



写真28：左が北船路の神輿、早朝やって来た道に戻る

に対して大きな権限を有するという役割も注目され、祭礼の歴史や背景を考える時に特筆されるであろう。

五箇の挨拶も、守山集落のキモイリ(肝煎)が、準備ができたので如何しましょうという投げかけを行うことは、北船路集落を支えてここまでやってきたという守山集落の自負であるかもしれない。

やはり、この祭礼は、かつて比叡山門領であったという地域の歴史と、日吉大社とのつながりが、過去に大きく影響していると言わざるをえないと考えられる。

今回は、守山集落を中心に祭を見てきたが、守山集落の中には、この祭礼を中心としながら、様々な共同体(コミュニティ)

が重層的に存在している。次項ではそのことにも触れてみたいと思う。

### 三、守山集落における多様なコミュニティ

#### (ア) 守山集落の氏子

守山集落は、行政区画では大津市八屋戸に含まれ、南に北船路自治会が、北に守山自治会がある。守山自治会は約二四〇戸で構成され、約三分の二が新興住民で、残りが古くからの集落(ここでいう守山集落)である。

守山集落は、六八戸あり、これらは樹下神社境内の牛尾宮と、集落内の若宮神社の氏子となっている。

氏子たちは、氏子会をつくって総代一名と副総代二名を置き、以下のような組織をつくって、五箇祭やその他の年中行事を行っている。

・寄人衆(番人衆とともに五箇祭全体の役の一つ。氏子会の組織ではない)

十七名。寄人衆を持つ家で世襲。五箇祭で、北船路の神輿が通る道やバンバ、樹下神社の参道を点検する役割を持つ。また、守山集落の神輿の飾り付けを行う。祭礼の前日「バンバ改め」に出席しなければならない。年に一度カクセツ(格節)という集まりを開催する。

・番人衆（寄人衆とともに五箇祭全体の役の一つ。氏子会の組織ではない）

寄人衆の長老格。寄人株を持つ寄人衆の株入りの古い順に、番人衆となる。年に一度、小正月に、他の集落の寄人衆とともに、カクセツ（格節）という集まりを開く。

・山調方（さんちようがた）

人数の規定はない。現在八名。氏子会の役。高校一年生から二五歳までの男子が対象。かつては、青年会が盆踊りなども企画したが、今では自治会が対応している。五箇祭においては神輿渡御（神輿担ぎ）など重責を担っている。ただ、現在では、人数が減ってきたため、五箇祭においては金棒引きと呼ばれる行列の先頭を歩く若衆（年齢順で二名）を担当するなどの役割にとどまっている。

・八人衆

八名。氏子会の役員。六人衆の上に立ち、満六〇歳になる年の一月十六日までその役につく。氏子会の行事としては、集落内の若宮神社と金毘羅宮の神事があり、六人衆とともに行う。若宮神社の神事は、氏神としてのものであるが、金毘羅宮は、守山集落の水害に対する治水や、かつて石や柴を切り出し、水運を使って運搬した歴史から、水運の守り神として祀られており、この地域独自の神事がおこなわれている。

それとは別に、山の神の神事がある。この神事は八人衆のみが執り行うもので、十一月と一月に山の神の祠の前で、大きな火を焚く、どんど（左義長）を執り行う。

・六人衆

六名。満四二歳になると入る。かつて集落の共有林を中心とした山の管理など、独自の役割があったが、現在は八人衆とともに、氏子会の神事を担当している。五箇祭では一名から二名が太鼓の番をするという役割を担う。

以上が、守山集落の氏子たちの役割とも言える。いずれのものも、一定の年齢に達すると必ず、何か集落の役割を担わなければならない。

#### （イ）守山自治会と「さっさの会」

※（さっさとは、神輿を担ぐ際に、勢いよく両手を伸ばして担ぎ上げる所作のことを言う）

・守山自治会

守山集落の古くから居住する住民のコミュニティを紹介してきたが、既述の通りこの守山地区には、新たにこの地域に入ってきた新住民（守山集落の三分の二を占める）の存在がある。

現代においては、行政区の単位として、自治会が形成され、新住民も古くからの居住者も自治会員であることには間違いがない。

そして、守山自治会が組織され自治会長がその自治会をまとめ、この自治会の存在は、他の集落においても変わりなく、基本的には古くからの住民と新住民も含めて自治会長が選ばれる。しかし、守山地区においては、自治会長と副会長は、古くからの居住者が順番に担当し、会計は新住民が担当することになっている。要するに、新住民は今のところ自治会長、副会長にはなれないという不平等がある。ただ、この制度に対して、新住民からの不満の声は上がらない。

結果として、五箇祭の際、神輿の渡御などの祭礼に対して、守山自治会の自治会長と副会長（古くからの住民で氏子会の会員であるため）が、氏子総代とともに、責任を負うというかたちが可能となるのである。

#### ・さっさの会

このことよって、守山集落に「さっさの会」というコミュニティをつくることができたのである。この会は、新住民による神輿を担ぐための会であり、自治会の下部組織となっている。おそらく他の集落には見られない集団で、神輿の担ぎ手が少なくなってきたという理由にとどまらず、新住民の地縁的なコミュニティを創出する目的も見られる。

五箇祭に参加する他の集落では、神輿の担ぎ手に苦慮しながらも、担ぎ手はあくまでも神事であるため、氏子会の会員に限らざるを得ない。古くからの共有財産の問題などもあり、複雑

な理由が各集落にある。新住民に一時的に助けを借りることはあっても、組織的に担ぎ手に加わってもらうことは難しい。

しかし、守山集落においては、自治会長と副会長が古くからの住民であり、祭礼を含む守山地区のすべてを担っているため、自治会の下部組織として新住民が組織をつくって神輿を担ぐことが可能となったのである。

このようにして「さっさの会」は、平成十九年四月に発足した。当初は、三〇代後半から四〇代の新住民の男性十九名がこの会に参加、現在は、三〇名を超えている。

五月三日の肩組に参加し、五箇祭当日は守山集落



写真30：五箇祭守山地区の「さっさの会」が加わる神輿（樹下神社前）



写真29：祭りの後のナオライ（直会）で、古くからの集落の担ぎ手と「さっさの会」の会員が親しく杯を交わす

の氏子会の神輿担ぎの人々とともにさつさの会のメンバーが加わって、神輿渡御に参加するのである(写真29)(写真30)。

・さつさの会の会員の声

さつさの会の会員である金澤篤さんという四二歳の男性に話を伺う機会を持った。

金澤氏は、平成十五年二月にこの守山地区に転居してきた。守山自治会員として地域の取り組みに参加する中で、木戸小学校区の運動会や、ソフトボール大会に出場した時、さつさの会の存在を知り、会員の一人から勧誘を受けて平成二三年に入会。入会しようと思った理由の一つは、もともと小学校の時から野球をやっていたので、日常的に体を動かすことが好きで、学区の運動会など以外にもお祭りで神輿を担ぐということに興味を持ったこと。もう一つは、自分に子供ができたので、自分と同世代で家族を持つ人たちとの交流が少しでもできればと思ったこと。

そして、一番大きな理由は、この地である程度長く、できれば、一生暮らしたいと思っていたので、地域の祭礼に関わることは、大切であると思ったこと。という三つの理由によるということであった。

また、新しくこの地域に入ってきて、さつさの会に入会する人は、概ねこのように考えていると思う。とも付け加えられた。現在、さつさの会の名簿は三〇名を超えるが、普段連絡を取

り合うLINE(スマートフォンを中心とした通信アプリケーション)のグループは十二名で構成されている。この十二名の年齢構成は、三〇代から六〇代と幅広い。

五箇祭で神輿を一緒に担ぐ、氏子会の人たちとの交流は、自然なかたちで行われるが、祭礼は氏子たちが支えてきたものであるという意識が、氏子会の方にもさつさの会の会員にもあり、さつさの会のメンバーは、できるだけ祭礼には出しゃばらないようにしている。という感想も聞かれた。少し以前は、神輿の渡御に関して、神輿の飾り付けや、担ぐことができる範囲(参道における場所)があるなど、さつさの会が参加可能な事柄に少し制限があったそうであるが、現在、それは無くなり、神輿渡御に関しては概ねすべてにおいて参加することが許されていると思う。ということであった。

このようにして見てみると、さつさの会というコミュニティは、単に神輿を担ぐお手伝いをする集団ではなく、そのことをきっかけとして、学区の運動会やソフトボール大会にもつながり、同時に、八人衆や山調方など氏子会の伝統のコミュニティにも触れながら、この地域に暮らすという一つの大きなアイデンティティの形成に寄与していることが理解できた。

## まとめ

今回の報告においては、一つに五箇祭における寄人衆という

独特な組織の役割を通して、祭礼の性格を分析してみた。この祭礼は、五つの集落が木戸集落の樹下神社を中心に執り行われる一般的な郷祭であり、例えば周辺地域の和邇地区や仰木地区の郷祭に共通する日吉大社の影響を見ることができるといえる。

特に、この五箇祭では、北船路集落に伝わる祝部行丸伝説や、樹下神社境内の祠の名称などから、他地域よりも日吉大社との関わりが深く、祭礼の催行のかたちからもそれが理解できた。

五箇祭は、北船路集落の女神を迎え入れるために、木戸集落が五月五日のハレの日までに、神社の境内や、参道、そして最も重要な御旅所とバンバを美しく整備するのである。北船路、守山集落の寄人衆が、協力し、責任を持って点検、確認する。

当日は、大物集落の男神が女神を迎え入れ、最後は、荒川集落の神も加わってバンバで送り出すのである。北船路の女神が、年に一度、樹下神社に向き無事帰ってくるという祭礼を成功させるため、近世から受け継がれてきたであろう五つの集落の共同体が一つとなるのである。

そして、一方、守山集落に目を向けると、古くから祭礼を受け継ぐ共同体である氏子会が、山調方や八人衆、六人衆というコミュニティを形成しながら、山の神や金毘羅宮の小さな祭礼を行い、新興住宅に住む住民たちは「さっさの会」という五箇祭において、守山集落の神輿を担ぐための新住民によるコミュニティがつくられていた。

近代化が浸透していく中で、日本の集落もその波にのまれ、

地縁・血縁的なコミュニティ（共同体）が分断されてきた。ただ、祭礼を伴う民間信仰においてそのささやかなる共同体が受け継がれてはきているが、大方の地域においてそのコミュニティも希薄になりつつある。

現代においては、そのような共同体の必要性が様々な方面から訴えられている。そのような中で、守山地区における、自治会の下部組織として新住民がさっさの会という組織をつくり、五箇祭の神輿を担いでいるという事実は、筆者が、これまで調査した集落に見ることがなかった事例として特筆される。また、さっさの会の会員の聞き取りにおいて、伝統の祭礼を受け継いできた古くからの住民へ対する畏敬の眼差しが、この新旧組織のつながりにおいて大変重要な要素であると理解できた。

哲学者の内山節氏は著書『共同体の基礎理論』の中で、「たとえばAさんはある企業という小さな集団に属しているとしよう。そのことによつて企業人としての習慣を身につける。ところが家に帰ると、Aさんは地域づくりをする小さな集団にも属しているとする。そうするとこのグループを介した精神の習慣も、身につける。さらに、土曜日には趣味のグループのところにかけて。日曜日には教会にいく。」と、一人の人間が複数の違ったコミュニティに身を置くことの重要性を語っている。複数のコミュニティの精神の習慣を身につけることによつて自分自身が多様性を獲得し、複雑な社会の中で展開される事象に対応できるようになると指摘している。

また、取材をする中で、古くからの住民の方から、「我々は、血縁、地縁のコミュニティに身を置くが、好縁のコミュニティも大切だ」という意見も聞いた。好き者同士が集まる集団は、自らがやろうとする意思がある前提であるため、その集団の結束は固いが、地縁・血縁のコミュニティは代々続いてきたということとつながるが、その維持には難しいところがあるのかもしれない。

現代において、コミュニティをどのようにつくり、維持していくのかという大きな課題は、今回のような報告で片付けられるものではない。より良きコミュニティ（共同体）のあり方を今後も考え、事例を集めることによって見えてくるものを発信していかなければならないことをこの調査で改めて感じた。

最後になりましたが、この調査について、貴重なお時間を割いてくださった守山集落の石塚政孝さん、守山集落さつさの会の金澤篤さんにご紙面をお借りしてお礼申しあげます。

### 参考文献

- ・堀内美緒「滋賀県大津市木戸地区樹下神社に関する祭祀組織、寄人衆（よりとしゅう）について」（京都大学大学院農学研究科修士論文所収 二〇〇七年）
- ・山形蓮「歴史的観点から見た五箇祭について」（二〇〇九年）
- ・志賀町史第二巻（志賀町史編集委員会編 一九九九年）

・内山節「共同体の基礎理論―自然と人間の基層から」（農山漁村文化協会 二〇一〇年）

・加藤賢治「村座と祭祀―滋賀県大津市仰木地区の例―」（近江地方史研究 第四四号 二〇一〇年）

・加藤賢治「宮座の祭祀―今堅田に伝わる祭礼 野神祭りに見られる現状―」（成安造形大学附属近江学研究所紀要1号 二〇二二年）

・加藤賢治「古式祭祀に見るコミュニティとそこに展開するコミュニティ―シヨン―大津市今堅田一丁目の愛宕講と地蔵講を中心に―」（成安造形大学附属近江学研究所紀要3号 二〇一四年）

・加藤賢治「御所山のお火焚き」（成安造形大学附属近江学研究所紀要4号 二〇一五年）



---

## 成安造形大学附属近江学研究所紀要 第6号

発行日 平成29年3月24日

発行 学校法人京都成安学園 成安造形大学 附属近江学研究所  
〒520-0248 滋賀県大津市仰木の里東4-3-1  
電話 077-574-2118

発行者 西久松吉雄

編集 成安造形大学附属近江学研究所

印刷所 宮川印刷株式会社

---

©Seian University of Art and Design 2016

ISSN 2186-6937